
魔物を飼う魔術師

プライド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物を飼う魔術師

【Nコード】

N2182F

【作者名】

プライド

【あらすじ】

クオリエンス・ウォルト・エウドランとりわけ魔物を飼う魔術師長い銀髪とダイヤモンドのような銀色の瞳の左目は黒い方眼鏡に隠されている世話役のハリス・ボールドと愉快的仲間とおくる魔術師探偵のものがたり

銀の風が吹くとき

ここセントラルシティは、この大国オリエンタルの首都だ
この街に最近やってきた青年がいた

「起きてくださいよ！もう起床時間とはとくに過ぎてますよ」

こんなに早いんだよ」

か」

「まさか今日の予定をお忘れですか？…あっ！」

「思い出しましたか？」

「もちろんだハリス今日は僕の母校オリエントの校長先生が依頼を持ってくださるのだ」

「おわかりになったのなら早く朝食を召し上がってくださいクオリエンス様」

から」

「わかったよハリス僕も腹ぺこだこの街で魔術を使って人助けをし

ているのがこの青年クオリエンス・ウォルト・エウドラン
彼は3カ月前にこのセントラルシティにやって来た

「はあ〜おいしかった！ハリスの

作る朝食は最高だ」

「そんなことはありません」

「そんなに照れる必要はないのに、僕は嘘は言わないよ」

クオリエンスは長い銀髪を整えながら言った

「そうですね、あなたは昔からそうですから」

ハリスは頬を赤くして言った　クオリエンスは銀色の瞳をハリスの金色の瞳をじっと見た　「どうなさいましたか？」

「いや、お前の髪も大分伸びたなと思った」

「そうですね、あなたの世話役としてはみつともないですね」

ハリスは自分の茶色髪を見ながら言った

それから数時間後：

一人の老人がクオリエンスのところにやって来た

「アルドレット先生よくこのセントラルシティまできてくださりありがとうございます」
「いやいや君こそ元氣そうでなに

よりだエウドラン君にボールド君卒業以来だ」

「先生こそお元気そうでなによりですね」

「アルドレット様どうぞこちらにおかけになってください」

ハリスはアルドレットを一人がけ用のソファアに座らせた

「ただいまお茶をご用意します」ハリスはキッチンに向かうため階段を下った
「君も物好きだね、魔術なんて」

「生まれつきの力なので」
「君も大変だね」

「そうですね、最初はこの力が恐ろしくてたまりませんでしたでしたが今ではこの力があることを誇りに思います」

「そうか君が満足しているならよかったよ」

しばらくするとハリスがトレイにカップを載せて戻ってきた

「お待たせしました」
「ありがとうボールド君」

「すまないなハリス」
「いえいえあなたの世話役の仕事をしたままですよクオリエンス様」

「では先生話の内容を…」
「そうだったね」

アルドレットは手を組んでさっきに比べて低い声で話し出した

「最近我が校で不審な噂が流れているのだ」

「噂？ 一体どの様な」
「私もあまり詳しく知らないが学校の第二書庫で不審な人を見たと言うのだ」

「書庫で？ 一体」
「それにその人物を見た生徒の数

名がその人に傷を負わせられたのだ」

「なんと！！」
「なんとかして解決したいのだ

が…」
アルドレットはクオリエンスの

目を見つめた
「わかりました」

「では、解決してくださるのかね」

「ええ、僕の母校を救いたいですから」

「ありがたい、明日のお昼頃に来てもらえないか？」

「わかりました」
「では、明日の午後に」

そう言うときアルドレットは席を立った

「ハリス先生を駅まで見送ってくれ」

「わかりました」

ハリスはアルドレットと一緒に

駅に向かった

後日クオリエンスとハリスはクオリエンスの母校オリエントに向かった

「さあ着いたぞ」

クオリエンスは学校を見渡した

「変わってないな」

「そうですね」

するとアルドレットがやって来た

「よく来てくれた」

「先生こんにちは」

「では君達はアドリアーノ寮に泊まってくれそれに何かあったらこの子に聞いてくれ」

アルドレットに紹介された生徒が

クオリエンスの前にきた
「こんにちはクオリエンス先輩ばくはアドリアーノ寮3年のミシュランです」

ミシュランは深々とおじぎした

「よろしくミシュラン」

「また後でクオリエンス君」

「はい」

アルドレットは去っていった
に向かいましょうか」

「クオリエンス様アドリアーノ寮
「そうだな」

「先輩案内します」

そしてミシュランが先頭に立った

「こちらです先輩」
に付いていった

クオリエンス達はミシュランの後

「こちらです」

ミシュランは扉を開けた

「ありがとう」

「じゃあぼくは戻ります」

「授業に遅れないでね」

「はい！」

ミシュランの元気な返事が返ってきた

「元気な人でしたね」

ハリスは荷物を整理しながら言った

た

「表向きはな」

「クオリエンス様また心の中をご覧になったのですか」

「自然と見てしまう」

「まったく：ミシュラン様はどの

ような考えを？」

「正直面倒臭いみたいだ」

「そうですか…」

ハリスは下を見た

「そんなにしよげることないさハリス人間なんてそんな者さ」

「クオリエンス様…」

ハリスは少し複雑な感じになった
その日の夕食時にオリエント全校

生徒の壮大な夕食会になった

「みなさん我が校の卒業生クオリエンス・ウォルト・エウドランです」
「みなさん僕はこの学校に起きて

いる奇怪な事件を解決するために来た。

何かささいな情報を知っている者がいたら僕のところに来てくれ僕はアドリアーノ寮に居る以上だ」クオリエンスの言葉が終わると生徒達から拍手が起こった

「彼は2年前に卒業したナリタブライアン寮で最優秀生だった」アルドレットの説明にまた拍手が起こった

夕食会が終わるとクオリエンスは謎の人物に怪我を負わされた生徒に聞き込みをした

「これで聞き込みが終わったなハリス」

「ええ」
「第一発見者のカイルは深夜換えし忘れた本を戻したさいに負傷したそうだ」

「第二発見者のエドガー様は友人達と一緒に宿題の調べをするために行ったとこ負傷されてます」

「情報はこれだけか…」

「まだかかりそうですね」

「今日はもう収穫がなさそうだしそろそろ寝るか」

「そうなさってください明日も早く捜査にでる予定ですので」

「わかったハリスも早く寝るんだぞ」

「わかりました」

「おやすみハリス」

「おやすみなさい」

ハリスは部屋を出た

「はあ、今日は忙しかったなあ」

クオリエンスは天井を見ながら言った

「なんだか懐かしいなこの部屋…そうか先輩の部屋に似てるんだ」
クオリエンスはそう思った後静かに目を閉じてねむった

翌朝クオリエンスは事件のあった
第二書庫へいった
「んー別に変わったことはないみ

たいだな」

「こちらは何もありませんでした」

「そうか：んっ！誰かいるのか」ク
オリエンスが大声をだすと一人の少年が出てきた

「ごめんなさい、お、おれナリタブライアン寮4年のアルト・クリス
タル」

授業中じゃないか」

アルトは下を向いた

そうなんだけどさ…」

「いじめかな」

うっ！」

アルトは凶星されたのでためらって

しまった

「凶星かい？」

そうだよ、何でおれだけ」

アルトは黒い瞳に涙を浮かべながら

言った

「君の心は泣いてるみたいだ」ク

オリエンスはさらっと言った

「当たり前だ！」

ア

ルトはクオリエンスを睨んだ　しかしクオリエンスは付け足した

「だけど本当は笑いたみたいだ」

アルトは次々に思っていることをあてられてしまうのでおどろいた
「クオリエンス先輩何でおれの思っていることがわかる」

するとハリスが急いで言った　「これ以上は話せません申し訳あ

りません」

ハリスは深々と誤った

「ごめんなさい」

アルトも誤った

「おれ先輩に伝えたいことがあって」

「なんだい？」

クオリエンスは興味津々に聞いた

「事件になってる人物はこの世にいない魔物だと思うんだ」

「魔物：か」

「でも実際に見てみないと」

「そうだな、アルト君も手伝ってくれ」

クオリエンスはアルトに手を出した

「わかった」

そして夜がやってきた

クオリエンスは扉の近くにハリス

は本棚の近くにアルトはクオリエンスの近くに待機した

「先輩今夜くる気がします！」

「僕もそんな気がするよ」

するよスッと物影が現れた

「あいつだ！」

アルトは現れた影を指した

「あれは…文献で見たことあるな」

「先輩知ってるんですか」

ああ、あれは人間の善心を吸う魔物だ」

ア

ルトは黙ってしまった

「クオリエンス様準備は出来てます

か？」

「ああ、僕も久しぶりで嬉しいよ」

「気を付けてください」

わかってるよ」

クオリエンスは魔物の方へ歩いてい

った

「先輩危ないですよ」

アルト様大丈夫ですよ、クオリエンス様は魔物を退治するのが本業
ですから」

アルトはクオリエンスのことをじっ

と見た

「

まさかお前の仕業だったなんて見当つかなかったよ」

魔

物はクオリエンスの方に近づいた

「お前：エウドラン家の奴か」 魔物は低い声で言った

「そうだ、僕はクオリエンス・ウォルト・エウドランだ」

「銀髪、銀色の瞳のエウドランの人間は許さない！」

すると魔物は霧状の物になった 「なっ！」

クオリエンスは驚いてしまった その隙に魔物はクオリエンスにも
のすごい速さで向かってきた 「隙だらけだ」

「しまった！」

魔物はクオリエンスの左目に入り

込んだ

「うっ！」

クオリエンスは左目を押さえ込んでその場に座り込んだ

驚いたハリスとアルトはクオリエンスのところに急いで行った

「クオリエンス様大丈夫ですか！！！」

「先輩！！！」

「だ、大丈夫だ」

クオリエンスはゆっくりと体制を立て直した

「さっきの魔物は？」

「霧状になって消えた」

「そうですか」

しかしクオリエンスは付け足

した

「消えたがもう大丈夫だ」

「では戻りましょうか」

クオリエンス達は部屋に戻った

ア

ルトは自室にクオリエンスとハリスは寮長室に戻った

「ハリス」

「どうしましたか？」

「単刀直入に言うがいいか？」

「何を言われようが驚きませんよ」

「そうか：さっきの魔物についてだが」

「もう大丈夫では無いのですか？」

「実のところ大丈夫だがこれを見ろ」

クオリエンスは隠れていた左目をハリスに見せた

「！！」

ハリスは目が丸くなった

「魔物が僕の左目に吸収された」クオリエンスに見せられた左目は右目のような銀色の輝きはなく、黒く暗黒な雰囲気がしていた

「まあ大したことはないようだ」

「安心しました」

ハリスはホッと一息した

「明日の事件解決した報告は眼帯をするよ」

「かしこまりました」

クオリエンスが奇怪な事件を解決した報告は翌日の昼食会に聞かされた

「皆さんこの学校で起きていた奇

怪な事件は無事解決した」

盛大な拍手が湧き上がった

「これで安心してくれ」

クオリエンスは着席した

すると隣に座っていたアルドレットがクオリエンスに尋ねた

「エウドラン君その眼帯はどうしたのかね？」

「ちよつとした事故で書棚の本が落ちてきてしまいました」

「そうか：無理せんようにな」

「はい」

そしてクオリエンス達が学校を去

る時間になった

「クオリエンス様そろそろお時間です」

「そうだな」

クオリエンスが馬車に乗ろうと

した時アルトが全力ではしってきた

「ちよつと待って！！」

「アルト！」

「アルト様！」

2人は同時に呼んだ

「おれも連れてって」

2人は目を丸くした

「おれクオリエンス先輩の役にしたい」

クオリエンスは悩んだあげく 「いいよ一緒に行こう」

「クオリエンス様！」

ハリスは驚いてクオリエンス

の方を見た

「いいだろハリス、アルトの

気持ちは必死の一言だ」

「わかりました」

「やったー！！」

「ただし僕の言うことは守

ってくれよ」

「うん」

その時のアルトは今までにないくらい明るい笑顔だった

翌日事務所に戻ったクオリ

エンス達はいつもと同じではなかった

「おいっ！：おいっ！」

「んーまだ眠いって」

クオリエンスは目をゆっくりと声のした方を見た

「やっと起きたか」

「お前は！！」

クオリエンスは目の前にいた見た目は狐のようだがうさぎ
くらいの大きさに銀色の毛並みを持ち金色の瞳が輝いていた生き物
に驚いた

「な、なんでこんなところに」

「お前が連れてきたんだろ」

「？」

クオリエンスは生き物の言ってい

ることが理解できなかった

「お前の左目が赤く輝いているだ

ろ」

クオリエンスは鏡を見た

「本当に：まさか」

「私はお前の左目に宿った風の魔

物だ」

「そうだったのか：お前の名は？」

「名は無い」

そうか：ならクレメンスならどうだ？」

クレメンス？」

「銀色の風という意味だ」

悪くないな」

「良かった」

るとハリスがやってきた

「朝から賑やかですね」

おはようハリス、僕に宿った魔物だ」

「そうですか」

「名前はクレメンス僕が付けた名だ」

「風の魔物という意味ですか」 「そ

うだ」

「ふぁー：朝から騒がしいですよ先輩」

アルトが大きな欠伸をしながら部屋に入

ってきた

「やあ、おはようアルト」 「おは

ようございますアルト様」

「なにあれ」

アルトはクレメンスを指した

「あれは風の魔物でクレメンスだ、これから一緒に生活する仲間だ」

「そうかよろしく、おれアルト」

「私はクオリエンス様の世話役のハリスです」

「ふむ」

「では、そろそろ仕事を始めよう」

そしてクオリエンスの長い1日が始

まった。

n e x t s t o r y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2182f/>

魔物を飼う魔術師

2010年10月9日11時07分発行